童話からみたワイルドの芸術理論

森元奈菜

はじめに

オスカー・ワイルドは，ワイルドは、生涯で 2 冊の童話集を出版している。一般的に、これらの童話集は、ワイルドが自身の二人の息子に伝えるために書いたと考えられている。しかし、これを決定付ける証拠はなく、また一方で、ワイルドの研究者であるジャラス・キリーンは *The Fairy Tales of Oscar Wilde* の中で、ワイルドの童話は多くの批評家から注目されていたが、ワイルドのイメージと童話の内容がかけはなれているため、他のワイルド文学とは無関係なものだと研究者から考えられてきたと指摘している。文学作品をそれ自体で独立した芸術作品と考えるワイルドからすると、現実世界や事実をありのままに描くリアリズムは芸術とは言えず、芸術家自らの想像力によって現実をそれ以上のものとして新しく作り出すことこそが芸術なのだ。これらの観点から，童話作品の中でも同様に、他の作品で明らかにされてきたワイルドの芸術理論を見つけることができるのではないかと考える。

本稿では、1888 年に出版された『幸福な王子，そのほかの物語』（*The Happy Prince and Other Tales*）の『幸福な王子』（ ‘The Happy Prince’ ）、『ナイチンゲールとばらの花』（ ‘The Nightingale and the Rose’ ）、『わがままな大男』（ ‘The Giant Man’ ）を主な対象とする。この３作品の中で、同時代に書かれた作品である『嘘の衰退』（ ‘The Decay of Lying’ ）の中で言及されているワイルドの芸術理論との関連性を考えていきたい。

『幸福な王子』

『幸福な王子』ではリアリズムとロマンスの２つの物語的要素から構成されると考えられる。１つは、物質主義や唯物主義の体現者として描かれた市会議員ら、そしてお針子や青年、マッチ売りの少女のような現実社会に存在したであろう貧困者を描いたリアリズム、そしてもう１つは、幸福な王子とツバメとの間の心の交流の物語を描いたロマンスである。リアリズムの観点から見た物語では、幸福な王子やツバメの施しは、何も変化を生まず、貧困問題はそのままで、解決されることはない。人々の日常には何の変化も与えられないまま、ツバメは死に、幸福な王子の像は処分され、町の描写はそこで終わる。一方で、ロマンスの側面から見てみると、その後も幸福な王子とツバメの物語は続き、神様によって、「黄金の町」と「天国の庭」に導かれることで、物語は幕を閉じる。ワイルドは、現実社会の問題が色濃く反映されている童話作品の中で、ファンタジーの虚構の世界を作り上げたうえで、実際に存在していただろう人々の姿を描くことで、ヴィクトリア朝の社会を風刺することに成功している。幸福な王子とツバメの献身的な行為により、現実社会のあり方がより顕著になって喚起されている。以上より、『幸福な王子』という１つの物語の中に、リアリズムとロマンス、それぞれ独立した物語が共存し、対立しつつも相互に結び合わされていることが分かる。

『ナイチンゲールとばらの花』

リアリズムとロマンスの観点から分けて考えるとすると、『幸福な王子』と同様、物語の舞台が現実を反映しているリアリズムの世界であり、ナイチンゲールが他の動植物と展開する物語がロマンスと考えることができる。この物語に登場する学生や、その学生が恋をする教授の娘は、物質主義の体現者として描かれている。一方で、ロマンス的側面に関わる面として描かれているナイチンゲールには、幸福な王子とツバメにあったような救済が描かれていない。この点は、ナイチンゲールは、芸術家として、自らの命と引き換えに赤いばらを完成させ、自身の死によって、芸術を完成させたと言えるのではないだろうか。このように考える

と、ナイチンゲールの死も１つの芸術作品を構成する出来事だと言える。

また、この作品に関しても、リアリズム的側面では、学生は恋に絶望することで物語は完結し、ロマンス的側面では、自己犠牲によって物語は幕を閉じる。このように、１つの物語の中に、リアリズムとロマンス、それぞれ独立した物語が共存していることが明らかである。

『わがままな大男』

物語世界では、庭の持ち主である大男が登場するが、その行動は多面的に描かれている。物語では大男はわがままな人物であると印象づけられているが、実際庭の持ち主は大男であり、自分の所有物を自分のものだという発言がわがままなことだとは、かならずしも思えない。しかし、この点に関しては、ワイルドは『社会主義下の人間の魂』の中で私有財産の廃止を主張しているため、私有財産という現実社会の問題を体現する人物として大男を描き、その制度をエゴイズムにもとづいて、冷酷にも悪用した罰として、わがままな大男の庭にはその後春が訪れなくなってしまったと考えることができる。ファンタジー的な物語展開のなかにリアリズム的現実が浮かび上がる。人食い鬼の友人を持つ大男というファンタジー的な物語世界の登場人物を通して、この物語でも現実社会を風刺していると言える。また物語は、大男が、小さな男の子に天国へと導かれることによって幕を閉じる。これは、ロマンス的エンディングといえるだろう。

童話と『嘘の衰退』にある芸術理論との関連性

ワイルドの童話において、１つの物語の中に、現実社会を風刺するリアリズム的側面と、慈悲の施しや自己犠牲といった倫理性や宗教色の強いロマンス的側面が存在することが分かる。この１つの物語の中に、２つの対立する側面を組み込む手法は、ワイルドの芸術理論と結びつけることができるのではないかと考える。

まず、『幸福な王子』と『ナイチンゲールとばらの花』では、慈悲を施す行為があるが、それは行為だけで完結している。『嘘の衰退』の中で、それ以上のものは何もなく、「芸術は芸術以外のなにものも表現しない」とあるように、幸福な王子とツバメ、またナイチンゲールは、それ自体だけで物語を完結させている。そして、『わがままな大男』では、「芸術が人生を模倣する以上に、人生が芸術を模倣する」という理論で理解することができるのではないかと考える。わがままな大男は、自分の罪を悔い改め、そうしてイエス・キリストとして描かれた小さな男の子によって天国へと導かれる。このような、聖書におけるキリストを連想させる物語展開は、人生が芸術を模倣するという型に基づいていると解釈できる。

このように、ワイルドが主張する芸術理論と密接な関係をもって、童話の物語世界が構築されている可能性を見てとることができるのではないか。そうした可能性を提示するとともに、これを本論のまとめとする。

引用文献・参考文献

Killeen, Jarlath, ed. *Oscar Wilde*. Irish Academic Press. 2011.

Killeen, Jarlath, ed. *The Fairy Tales of Oscar Wilde*. Ashgate Publishing Company. 2007.

Robbins, Ruth. *Oscar Wilde*. Continuum. 2011.

Sloan, John. *Oscar Wilde*. Oxford World’s Classics. 2009.

Wilde, Oscar. *Intentions and The Soul of Man,* Robert Ross. Dawsons of Pall Mall, 1969.

Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray,* Penguin Books. 2003.